

金賞

保全への第一歩

富士フイルム株式会社

和田 直樹

「保全マンは、暇な方が良いんだよ！」これは、私が日頃お世話になっている保全マンが忙しそうに飛び回っている姿を見て「今日も忙しそうですね。」と声を掛けた時の返答でした。そのときは、その言葉の意味もたいして理解できず、愛想笑いでその場を後にしました。

これは私が入社3年目に中量製造の職場に配属されていた頃の話です。ある日、粉体原料・樹脂・溶剤を入れて練り合わせる“混練機”を使用した作業において、完成した液体を外のタンクに排出するダイヤフラムポンプから液がなくなってしまうトラブルが発生しました。これは私が入社する前から度々起こっていた慢性的なトラブルでした。自分たちで原因を追及するわけでもなく、その時も当たり前のように設備保全担当の部署に連絡をして担当者を派遣してもらいました。この頃、現場オペレーターであった私は設備を修復するのは保全部門の仕事と考えていました。今回も現場に来てくれたのはあの時の保全マンでした。「忙しいのにすみません。またいつものです。」と告げると、嫌な表情ひとつ見せず作業の準備を始めました。ポンプが修復しないと何もできないので「今日は修復作業を見させてもらってもいいですか？」と告げると、保全マンは「おっ、それは保全への第一歩だね～」と笑いながら言いました。そして手を動かしながら、設備の保全とはまずその設備に興味を持って、設備の声を聞くことが大事なんだよ！と教えてくれました。「設備の声？」と、私が不思議そうな表情をしていると「本当の声じゃないよ。設備が故障したりするときには必ず何かサインを出してくれているんだ。音がおかしかったり、温度が高かったり、設備がオペレーターに何か訴えているはずだよ。今日も何かいつもと変わったことはなかったかい？」と言われました。私は、今日のことを思い出しました。「確かに排出するときに、ポンプ内の金属ボールが上下するときのカコンカコンという音がいつもより小さかったような気が・・・。」すると、「それは設備の声だね。じゃあ金属ボールの所をばらしてみようか。」と手際よくばらしたすと、ポンプヘッドの逆止弁に大きな原料の塊がつまっていました。それを取り除き、組み立て直すとポンプはいつものような響きの良い音をたてながら

液を排出しました。

そのようすを見ていた保全マンは「設備も人と一緒に、調子悪いときはちゃんと教えてくれているんだよ。ただ興味を持っていなければ、それすら見逃してしまう。今日、君は設備の声を聞けたんだよ。」私はそれを聞いて、なんだか凄く嬉しく誇らしげに思いました。保全マンは帰りぎわ、慢性的に発生する今回のトラブルを未然に防ぐには、こまめにばらし洗浄をするといいとアドバイスをくれました。そこで私は、職場内で異常報告をするとともに使用後に毎回ばらし洗浄をすることを提案しました。他のオペレーターからは、手間と時間がかかるし、それは保全マンの仕事だと反対の声も上がりましたが、試行期間として半年間続けさせてもらえることになりました。すると今までは2ヶ月に一度は止まってしまっていたポンプが、半年間一度も止まることはなく、安定的に製造することができたのです。

ある日、あの保全マンと構内ですれ違ったとき、「ばらし洗浄を毎回やって提案したんだって？それでポンプが止まらなくなったって聞いているよ。だから最近、俺は暇になったよ。」と笑いながら言っていました。このときに半年前に言われた「保全マンは、暇な方が良いんだよ！」の本当の意味を理解したように感じました。

今は、そのときの職場からは離れてしまいましたが、今の職場でも設備の声を聞きながら自主保全に取り組んでいこうと思います。